

|                           |  |                        |     |            |          |
|---------------------------|--|------------------------|-----|------------|----------|
| 都道府<br>県・<br>指定都<br>市番号   | 13   | 都道府<br>県・指<br>定都市<br>名 | 東京都 | 研究課題番号・校種名 | 2 (4) 高校 |
|                           |  |                        |     | 領域名        | E S D    |
| 研究<br>課題                  | <b>学校全体で取り組む研究課題</b><br>(4) E S Dを学校全体で体系的に推進するための教育課程の編成，指導方法等の工夫改善に関する実践研究   |                        |     |            |          |
| 学<br>校<br>名<br><br>童・生徒数) | (児 <small>とうきょうとりつ た ま こうとうがっこう</small> 東京都立多摩高等学校 (581 人)   |                        |     |            |          |
| 所在地 (電話番号)                | 〒198-0088 東京都青梅市裏宿町 580 (0428-23-2151)   |                        |     |            |          |
| 研究内容等掲載ウェブ<br>サイト URL     | <a href="http://www.tama-h.metro.tokyo.jp/site/zen/page_0000000_00034.html">http://www.tama-h.metro.tokyo.jp/site/zen/page_0000000_00034.html</a><br><a href="http://www.tama-h.metro.tokyo.jp/site/zen/page_0000000_00027.html">http://www.tama-h.metro.tokyo.jp/site/zen/page_0000000_00027.html</a><br><a href="http://www.tama-h.metro.tokyo.jp/site/zen/page_0000000_00034.html">http://www.tama-h.metro.tokyo.jp/site/zen/page_0000000_00034.html</a>  |                        |     |            |          |
| 研究のキーワード                  | ○「社会とつながる」 ○「学びの価値を問い直す」 ○「多様な方法」  |                        |     |            |          |
| 研究結果のポイント                 | <p>○学校を地域に開き，社会とつながることで学びの価値を問い直した結果，学習意欲が向上した。地域の問題や文化と授業や行事を通してつながり，実際に学んだ内容が実社会で役に立っていることを生徒たちが実感することができた。学校と社会が分断された世界ではなく，つながりを意識することで学習への主体性，意欲の向上が確認できた。保護者とのつながりが強化され，保護者の教育活動への参加率が向上した。</p> <p>○地域の期待に応じて連携し，感謝される経験は生徒を勇気づけた。地元企業・自治体等と連携し，多様な行事や授業に主体的に参加することで，学内外の方々から感謝され，自分の学習活動が地域で役立っていると感じる経験をすることができた。新聞やテレビの取材を受ける経験や，協力成果の発表（市役所や東京大学）を行うことで自らの学習活動が肯定的に取られることを知り，これらの事柄から勇気づけられ，自己肯定感を高める生徒が増加した。</p> <p>○様々な年代・国籍の方々とのつながることで，「共生」について考察するという生徒の変容が見られた。異年齢の方々とのふれあいから，ケアの視点を持って自らのライフヒストリーを省察し，将来を想像して主体的・計画的に学ぶ生徒が増加した。</p> |                        |     |            |          |

## 1 研究主題等

### (1) 研究主題

進路多様校における，地域連携型授業を活用したカリキュラム開発

### (2) 研究主題設定の理由

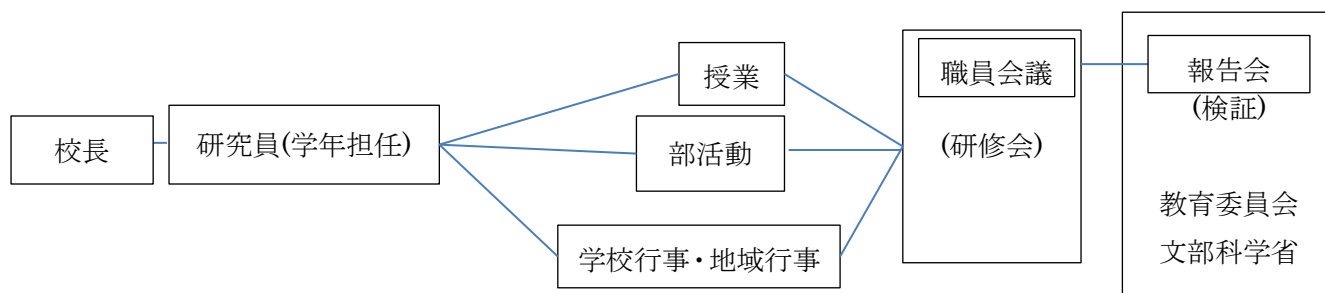
本校は都内でも有数の伝統校であり進路多様校である。中学校までの講義形式の授業に困難を感じた生徒が多く，自己肯定感が低い。将来における勉学の意義を見出せないため，学業半ばで退学を選択する生徒も少なくない。家族や地域，友人など社会とのつながりの希薄さは，彼らの生きる視野を狭めさせ，自己肯定感を低くしている一因である。生徒たちに地域や社会とのつながりを実感させ，未来に向けた広い視野を醸成することは喫緊の課題である。

生徒と教師が周辺住民，周辺の豊かな自然などに触れ，地域活動に問題解決意識を持って取り組

むことで、自主的かつ積極的に学び、考え、行動する力をつける。生徒が地域とつながり、そのつながりの中で認められる体験を積んで自己肯定感を高める。「共生」している自分を知り、実践的な経験を積むことで得られる生徒の変容を量的・質的に評価する。その評価を軸に、ESD の考え方を基とした「地域連携型授業」のカリキュラムを提案する。

### (3) 研究体制

校長を代表として、研究員が立てた研究の計画・骨子に従い、職員が研究活動をし、職員会議(研修会)で研修を行う。そして東京都教育委員会、文部科学省にて報告・検証を行う。今後は毎年この活動を持続することで、本校の教育P D C Aサイクルを回し続ける。



### (4) 2年間の主な取組

|        |  |
|--------|--|
| 平成28年度 | <p>1 学期 (4 月～7 月)・ESD 研究授業・行事として 16 活動実施。以下、主な活動例を挙げる</p> <p><b>青梅大祭参加</b></p> <p>本校所在地の青梅大祭に参加。地域の高齢化に伴い山車の引手が不足しており、参加によって地域の歴史や伝統に触れながら、地域の方に感謝される機会を得ることができた。</p> <p>2 学期 (8 月～12 月)・ESD 研究授業・行事として 20 活動実施。</p> <p><b>生物の授業「ハクビシンとの戦い！」</b></p> <p>本校内に畑を作り、耕し、種をまき、世話をし、収穫し、その野菜を食べるまでを通した授業を行うとともに、青梅市特有の問題として、ハクビシンという害獣について学習し、柵を作る作業などを行った。</p> <p><b>文化祭での多様な交流</b></p> <p>地域市民が舞台参加を行い、伝統のお囃子を披露した。地域店舗・企業と協力し、生徒たちが企画・活動を行った。地域市民が地元の文化財や古い資料などを持ち寄り、展示を行った。ESD 研究成果の展示を行った。海外の人向け文化祭案内英語ツアーを企画し、実施した。</p> <p>3 学期 (1 月～3 月)・ESD 研究授業・行事として 7 活動実施。</p> <p><b>英語の授業「外国人の方向け青梅ツアーを作ろう」</b></p> <p>青梅市観光協会と協力し、外国人の方向けツアーを作成、実施した。英語での青梅案内ツアーを作り出した。その中から観光協会の方が最も良いツアーを選出、採用した。生徒はツアーの宣伝ポスターを自主的に英語で制作し、街に展示した。ツアーは青梅市観光協会の HP で宣伝され、実際に外国人の方を生徒が案内した。</p> |
| 平成29年度 | <p>1 学期 15 活動実施 以下に主な活動例を挙げる。</p> <p><b>地域行事への参加</b></p> <p>昨年度実績を基にして地域からの要望が増加し、延べ 85 人が地域行事へ参加した。</p> <p>2 学期 13 活動実施</p> <p><b>文化祭での多様な交流</b></p> <p>交流の範囲を拡大し、昨年度の内容に加えて 60 年前の卒業生が結成する尺八部の演奏など、</p>  |

文化祭を通して、生徒、教員、地域、海外、卒業生、子供たちなど多様なつながりにおいて交流する機会に発展した。

#### 小学校での英語出前授業の実施

昨年度小学校での出前授業は1校であった。評判の高さから他の小学校から要望が続き、生徒たちは青梅市全ての小学校で出前授業を行うという目標を自主的に建てた。現在3校において実施済みである。生徒たちは授業を行うことに自信を持ち、改善を続けている。

#### 校内研修

ESDをテーマに本年度は3回実施した。ESDとは何か、ESD研究活動の報告、またESDに取り組んだ教員のインタビューなど研究活動の進捗を報告、周知し互いの意見をつなげる機会となった。教員側にも「学ぶ価値の問い直し」の機会となった。

#### 森林保全活動

PTAの協力を頂き、異なる世代や地域活動に密着した活動内容に発展した。地域の小学校や中学校が植林を行っている場所への移動により、高校生の活動が小・中学生、また高齢化する林業に直接つながり、高校生の力が役立っているという実感を持てる行事に発展した。

3学期 6活動実施予定

#### 東京コンファレンス参加

東京大学で行われる学びを通じた地方創生報告会「東京コンファレンス」への参加を、青梅市からの要請を受け参加する。継続して地域での活動を行っている生徒会役員生徒と教科(英語)が代表し「学校教育×社会教育～高校生によるまちづくり～」において発表を行う。

## 2 研究内容及び具体的な研究活動

### (1) 研究内容

#### 研究の視点

地域とのつながりに着目し、「自然・環境」「産業・経済」「人間・生活」の3分野にわたって継続的な地域連携型授業を実施した。授業の振り返りと評価を通して、生徒の学習と教育におけるあらゆる段階でのアプローチに包括的に取り組んだ地域連携型カリキュラムを開発した。

#### 手立て

地域連携授業・行事を行い、複数の教科が上記の3分野にわたって学ぶ機会を設ける。各教科の授業に地域の外部講師の招聘(学習内容の拡張)、地域に生徒が出向き学習するフィールドワークを行う授業の実施(空間の拡張)、キャリアデザインやHRの時間の活用(時間の拡張)などを通して、生徒は地域の一員として課題を見出し、協働的に問題解決を図ることに参画する意識が育成されることが期待される。これらを通じて持続可能な社会づくりの概念が醸成されると考える。豊かな自然を意識し、地域の中で認められる経験は彼らの学校生活を支え、社会人としての責任や持続可能な社会についての教育に発展していくと仮定した。

### (2) 具体的な研究活動

- ・クラスの仲間、学年、学校生徒など校内での交流を第一の段階として設定した。これらの段階を経て自信をつけた後、学外のコミュニティとのつながりを意識したカリキュラムを展開していく。
- ・ESD研究を授業に取り込むために、他との「つながり」を意識して各教科の目標を立てた。さまざまなアイデアが提案され、英語科の外国人向けツアー実施など、講義形式の域を超えた授業展開となった。
- ・多種多様な地域との交流授業・活動が展開された。これらの生徒の振り返りや、データの保管、

情報の周知（例：学校アンケートの実施・集計）などにクラウドシステムを利用した。

・学校行事，学年行事，教科の段階において，自然と環境，産業と経済，人間と生活の3つのアプローチで地域性を取り入れた。

・常にフィードバック（講師の方の感想や，地域の感謝の言葉など）を行い，活動を通して自らの自信につながるよう工夫した。

注：概念図として，質の高い医療従事者の教育を模索した先行研究，*The urban and community health pathway: preparing socially responsive physicians through community-engaged learning.*（Linda N, Johnson SL, Gilbert IA, 2011）における，学習者とコミュニティとの関わりを示す図を参考にした。

### 3 研究の成果と課題（○成果●課題）

○・・・出席不良者（遅刻・欠席数）の減少：前学年と比較して研究対象学年 57%減少（H29・2学期末まで）

○・・・学習意欲の向上：特進クラス希望者増加（前年度比約 2.5 倍）検定（英検・漢検・情報検）受験者増加（過去3年間の約 2.5 倍）英検準二級・二級合格者複数名，4年制大学希望者増加（前年度比約 10%増加）

○・・・「共生」への意識の向上：異文化交流により，外国の方との交流について印象が改善した生徒は約 65%，森林保全活動により，環境保全への関心が高まった生徒は約 70%，地域の課題の解決に具体的な提案を出した生徒が約 40%存在した。

○・・・「地域とのつながり」に着目したカリキュラムマネジメントを実施した結果，学校教育に関わる教育的資源が増加・拡大した：関わった団体や行事がリピーターや宣伝となり，より多くの団体から地域活動を通じた教育への継続的な協力を頂くことで，生徒の学習機会が拡大した。

○・・・「地域とのつながり」に着目したカリキュラムマネジメントを実施した結果，学校の教育がルールベース（やるべきことが基盤）ではなく，バリューベース（価値のあることが基盤）に変わっていった。結果として，授業を大切に考える生徒が増加した。

○・・・社会的な評価の増加：研究前はほぼ無かったメディアへの紹介や取材が増加したことで生徒や保護者の学校教育への信頼感・自己肯定感が向上するという影響を与えることができた。

○・・・クラウドシステム活用の発展：H28 年度入学生が導入したクラウドシステムを H29 年度入学者も採用した。またこのシステムを足掛かりとした教育活動（東京都のクラウドシステムを通じた学習支援の重点指定校）へと発展した。

●・・・教員の負担増加と他学年への拡がり：学外の方々との打ち合わせや準備等々は勤務時間外に行われることも多く，負担は増加した。また，研修の回数は研究開始前と比較して2倍に増加した。そのため安定的に毎年度の取り組みとして引継ぎが難しい。

●・・・転退学者が減らない：（対象学年を過去3年間と比較して変化がほぼ無い）

### 4 今後の取組

今後は，これまで行ってきた2年間の取り組みを統合させ，持続可能な教育という学校文化を作る。持続可能性の実現を通して，地域との協力関係と相互交流を学校文化として根付かせ，地域のプラットフォームとしての学校機能を継続する。

研究対象学年の卒業までのデータを分析し，ESD 研究が進路多様校にどのような変容をもたらしたのかを明らかにする。